慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ワグナー博士編 アダム・スミスよりジョン・デューイに至る社会改革家
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.4 (1935. 4) ,p.593(119)- 597(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19350401-0119
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350401-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

爲を指導すべき經濟政策學の成立を確信することが出來る。而して以上の所論に依つて吾人は意思の自由を承認せざる可からざる所以を明ならしむることが出來たと思ふ。

ワグナー博士編『アダム・スミスより ジョン・デューイに至る社會改革家』

高橋誠一郎

アダム・スミスからジョン・デューイに至る過去一百五十年間に於ける種々なる社會改革思想家の著作中から特に永續性を有する諸節を拔萃し、之れを一卷に纂輯し、其の各々に、個人的經驗と學說的傾向との間の關係の或る物を明かにし、又、學說の源泉及び影響を示すを以つて目的とせる傳記的附記と、更らに深く研究せんとする者の便宜を企圖せる極めて簡略なる參考書目を附したものが Social Reformers Adam Smith to John Dewey. と題して、昨一千九百三十四年二月、紐育に於いて出版せられた。編者は紐育大學歷史教師（インストラクター）ワグナー博士(Donald O. Wagner)であつて、コラムビア大學歷史敎授ヘーズ氏 (Carlton J. H. Hayes) の短き序文が附せられてゐる。

編者は年代、見解の類似及び學說の進化を考察して諸社會思想を類集し、全篇を分つて九部と做し、第一部「初期經濟的及び政治的自由主義」に於いては、アダム・スミスの『國富論』、ジェレミー・ベンサムの Principles of Morals and Legislation. A Fragment on Government. Principles of the Civil Code. 其の他の著作、トーマス・ロバート・マルサスの『人口論』、デヴィッド・リカードオの『經濟學及び課稅原理』、及びトーマス・ペインの The

Rights of Man. から、第二部「新社會制度の批評」に於いては、ウイリアム・コベットの Political Register 紙、ジャン・シャール・レオナール・シモンド・ヅ・シスモンディの Nouveaux principes d'économie politique. 及びトーマス・カーライルの Past and Present. から、第三部「初期十九世紀社會主義」に於いては、ユートピア社會主義者ロバート・オーエンの Report to the County of Lanark. シャール・フーリエの Le nouveau monde industriel et sociétaire. 及びルイ・ブランの L'Organisation du travail. 基督教社會主義者チャールズ・キングズリイの Cheap Clothes and Nasty. 及びヴィルヘルム・エマヌエル・フォン・ケッテラーの Die Arbeiterfrage und das Christenthum. 並びに無政府主義者ウィリアム・ゴッドウィンの Enquiry concerning Political Justice. 及びピェール・ジョヅェーフ・プルードンの Qu'est ce que la Propriété? から、第四部「辯明せられ且つ修正せられたる經濟的自由主義」に於いては、ハーバート・スペンサーの The Principles of Sociology. The Man versus the State. オーギュスト・コントの社會哲學に關する初期の論文及び Système de politique positive ou traité de sociologie instituant la religion de l'humanité. 中の『實證主義の一般的見解』、及びジョン・スチュアート・ミルの『經濟原論』から、第五部「所謂科學的社會主義」に於いては、カール・マルクス及びフリードリッヒ・エンゲルスの『共產黨宣言』及びエヅアルド・ベルンシュタインの『進化的社會主義』から、第六部「定限的及び無定限的國家社會主義」に於いては、ヘンリー・ヂョーヂの Progress and Poverty. アドルフ・ヴクナーの社會問題に關する演說、及びシドニイ・ウェッブの Fabian Essays in Socialism. 中の論文から、第七部「勞作者の支配、革命的及び進化的機能理論」に於いては、無政府主義者ミハイル・バクーニンの諸著、サンディカリスト、ヂオルヂ・ソレルの Réflexion sur la Violence. 及び共產主義者ニコライ・レーニンの Staat und Revolution. ギルド社會主義者エス・ヂイ・ホブソンの National Guilds. An nquiry into the wage system and the way out. 及び加特力教社會改革主義者レオ十三世の Rerum Novarum. から、第八部「ファッシズム」に於いてはアルフレドォ・ロッコォの一千九百二十五年八月三十日の演說から、而して最後に、「現代社會の批評家及び解說者」に於いてはレオ・トルストイの『我れ等何を爲す可き乎』及び『神の國は汝等の內に在り』、ソウアスタイン・ヴィブレンの Theory of the Leisure Class. リチャード・ヘンリー・トーニィの The Acquisitive Society. 及びジョン・デューイの Individualism Old and New. から主要なる章句を拔萃してゐる。

洵にヘーズ教授が本書の序文中に言ふが如く、「事實、『新たなる社會的秩序』は一百五十年間、――人口が革命的割合に於いて、田圃から工場へ、地方から都會へ、農業から工業へ移動し始めてから絕えず、又、偉大なる思想家が近代的生活の本質的に動的なる性質を承認し、而して其の進路及び歸趣に就いて考察し始めてから、絕えず、發現しつゝあつたのである。蓋し近代的社會の進化は、啻だに物質的事情及び工藝的發達に依賴せるのみならず、又、人間の仰望と哲學者の勸告に依賴し、又一百五十年間絕えず依賴し來つたが爲めである。產業革命の初期の階段と時を同じうして、又、亞米利加獨立の宣言の現れたと同一の年に於いて、アダム・スミスが其の Wealth of Nations. を、又、ジェレミー・ベンサムが其の Fragment on Government. を出版したことは重要なる意義を有するものである。是れ等の古典は新たなる社會的秩序に對する基礎を置くに於いて蒸氣機關其の者と等しく有力なることを明かにせる經濟的及び政治的自由主義の學說を表明した。蒸氣機關は一定の新制度を實行し得可く、又避け難きものたらしめたのであるが、スミス及びベンサム（並びに亞米利加共和國の建設者等）の自由主義は意識的に其の新制度が眞にあらねばならぬ所のものに就いて建築師的設計に着手したのである。此の時以來新社會制度の建築は速

かに進んだ。あらゆる世代は新たなる構造材料若しくは古き材料に對する新たなる使用法を發見した。現代に於いては構成の可能性並びに破壞の其れも亦、殆んど無限に擴張せられた。然しながら、吾人は、斯くの如き可能性が、彼れ等が將來の想像せられた社會に就いて行つた彼れ此れの製圖に就いて庶民の是認、時には又、政府の其れを得た歷代の建築技師——社會哲學者——によつて制約せられて來たことを記憶しなければならぬ。其の製圖及び設計書は多樣である。是れ等のものは皆だに自由主義及び『粗野なる個人主義』のみならず、空想的及び『科學的』、集產主義的及び無政府主義的、共產主義的及び基督敎的と言ふが如き種々なる樣式の社會主義をも亦、包含する。而も、是れ等のものゝ總べては、多少の程度に於いて、現時の知識的相續產の一部分である、隨つて又、吾人にして若し發現しつゝある社會制度に於ける最近の階段を眞に理解せんとしたならば、當代の統計若しくは機械學を研究すると等しく近代社會思想の古典に關する直接の知識を持つことが重要である。」而して斯くの如き知識に對する便宜なる手引が本書によつて與へられてゐる。

編者の行つた諸派の配列並びに代表的思想家及び其の主要文獻の選擇等は大體に於いて當を得たものと云ふことが出來る。社會改革理論に對する總べての重要なる寄與を悉く一卷中に包含せしむることは恐らく不可能であらう、從つて流派と人物と文獻とに於いて其れ其れ幾分の遺漏あることは固より已むを得ざる所である。然しながら、近世社會改革思想文獻の拔萃を殊更らにアダム・スミスより始めて經濟的自由主義體系中に重農主義を擧ぐることなく、又、自由主義に對する初期の反對者中にアダム・ハインリッヒ・ミューラー等の政治的浪漫主義（Die politische Romantik）、フリードリッヒ・リスト等の國民主義を加ふることなく、又、所謂「科學的社會主義者」中にヨハン・カール・ロードベルトスを掲ぐることなく、而して全然シャール・ヂード等の社會連帶主義（Solidarisme）を逸したるが如きは蓋し論者の間に異論あるを免れざる所であらう。

然しながら、吾人が本書に於いて是れ等の諸點よりも更らに大なる遺憾を感ずるは、編者が讀者の爲めに先づ概論として諸社會思想體系の意義を明かにし、其の相互の異同を了知せしむるに努めざりし一事である。編者は恐らく幾多の社會改革思想史が既に世に行はれつゝあるに安んじて、自ら斯くの如き勞作を行ふことがなかつたのであらうが、一般讀者は必ず此の點に於いて不滿を抱くことゝ考へる。編者によつて附せられた傳記的緖言は簡素悅ぶ可きものがあるが、而も果して能く其の所期の目的たる、個人的經驗と學說的傾向の關係を明かにし、學說の源泉及び影響を示すに於いて遺憾なきを得たるや否やは疑問である。參考書目は更らに深く研究を積まんとする者の爲めに有用且つ up-to-date なる手引たらしむるの目的を以つて附加せられたものであるが、而も固より簡略に過ぐるの憾みあるを免れない。（紐育マックミラン會社發行、七百四十九頁、丸善株式會社賣價金九圓七十五錢）